様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月３０日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１５２０５１２

研究課題名（和文）16－20 世紀日記・書簡資料の英語史研究への貢献―更なる展開

研究課題名（英文）Contribution of Non-Literary Texts Such as Sixteenth to Twentieth-Century Diaries and Correspondence to History of English Research: Further Developments

研究代表者
中村不二夫（NAKAMURA FUJIO）
愛知県立大学・外国語学部・教授
研究者番号：20149496

研究成果の概要（和文）：英語史研究は長い歴史を有するが、21 世紀初頭にあっても、これまで語法分析されていない私的な日記・書簡資料を丹念に調査すると、従来考えられていたよりも早い言語変化の最前線を示す用例や、これまで未発見ないしは稀有な語法を発掘するなど、英語史実の訂正につながる用例に多々出くわす。この点を、2 点の著書(分担執筆)、１編の紀要論文、４つの国際会議口頭発表、１つの国内全国学会口頭発表の仕事を通して実証した。

研究成果の概要（英文）：Even in the early 21st century, sundry evidence leading to the correction of English historical facts, including quotations indicating the initial phase of linguistic change and those resulting in the uncovering of rare or unknown usages, can be encountered from the reading of documents such as private diaries and personal letters which have remained linguistically unanalyzed. I tried to demonstrate this by delivering four oral presentations at international linguistic conferences and one oral presentation at a nationwide conference, as well as writing two jointly written books and one university journal article.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：英語史・近代・日記･書簡・文法変化・語彙変化・助動詞

１．研究開始当初の背景

本研究は、2006 年度-2008 年度研究「16－20 世紀日記・書簡資料の英語史研究への貢献」を更に発展させた研究である。

英語史研究は、19 世紀半ば以来、文学作品の言語分析に基づいた研究が主流であったが、報告者は、英語史を志した 1970 年代末から今日に至るまで、伝統的研究を補う形で、1500-1950 年に書かれた日記・書簡資料を分析し、文法と語彙の歴史を正すことを研究課題としてきた。これらの資料は、言語変化の最前線を知る、語法の時代的欠落を補う、消

滅したはずの語法が存続しているかどうかを探求する、未発見ないしは報告例がまれな語法を発掘する、ある時代に生きた庶民の語法に対する生の証言を収集する上で貴重だからである。折しも、20 世紀の終わり頃から、外国においても徐々に文学作品以外の英語も調査資料にすることの重要性が認識され始め、報告者の研究も意義をもつようになった。

まさにこのような背景の中、報告者は、長い伝統をもつ英語史研究の分野であっても、21 世紀初頭の今日でさえ、未踏の 16-20 世紀日記･書簡資料を大規模に調査・分析すれば、一日本人にも稀有な語法･未知な語法の発掘が可能であるなど、英語史研究へ大いなる貢献ができると考え、研究を開始した。

２．研究の目的

(1) 日記･書簡の英語を集中的にしかも大量に分析した英語史研究は類例がなく、本研究によって行う大規模研究により、主として文学作品に基づいている従来の英語史研究の不備を補おうとした。

(2) とりわけ、1700 年以降の使用実態についての大規模な通時的研究は皆無に等しい。近代英語後期の 1700-1900 年の英語は現代英語とほとんど違いがないと誤解され、研究が手薄となっていたためである。この、いわば空白の時期の助動詞の使用実態を解明するため、規模の大きな研究を行おうとした。

３．研究の方法

(1) 用例収集にあたり包含と除外の厳密な分析基準を立て、1 例ずつ慎重に吟味しながら用例を集めた。基準によって統計数値は大きく変動するため、それに依拠する結論が英語の史実を歪める恐れがあるためである。また、異なる調査資料に基づいて分析結果を得た他の研究者が、報告者の分析結果と比較できるようにとの配慮からである。たとえば、*Be not noisy!*型から *do not be noisy!*型への歴史的推移を実証した「図書①」では、10 の基準が明記され、統計数値に信憑性を与えている。

(2) 近年、電子コーパス利用の英語学が盛んであるため、報告者もこれを研究に採り入れた。しかし、報告者は、130 冊、研究テーマによっては 150 冊の書籍による資料の網羅的用例調査をも行っている。時間と労力を要する過酷な作業ではあるが、これにより、他者の追随を許さない、大規模研究となっている。

(3) 一次資料からの用例収集の結果を厳密な生起数で示すだけでなく、それが歴史的にどのような意義をもつかについても、十分に先行研究を参看した上で詳らかにした。

４．研究成果

(1) 2009 年度は、継続研究初年度であり、また、所属する近代英語協会の事務局長という多忙な役職に就任したため、遺憾ながら、公刊された形に見える成果はない。この年度に行ったことは次のとおりである。

「研究計画調書」および当該年度「研究の目的」「研究実施計画」に則り、4 年間にわたる継続研究の基礎作業として、InteLex 社 *Past Masters* シリーズの CD-ROM データベース（J. Bentham 等の 16-20 世紀日記・書簡資料）をパソコンにインストールし、I not say 型否定平叙文と疑似助動詞 be coming to-不定詞の用例収集を行った。研究機関の雑誌に成果を掲載する予定だったが、集まった用例数が立論するに十分ではなかったため、更に用例収集を続けることとした。また、第 16 回国際英語史会議の発表許可通知が届き、原稿とハンドアウトの作成を開始した。「研究計画調書」では I not say 型否定平叙文の歴史に関する発表を予定していたが、上に示した理由により、“A history of the auxiliary *do* occurring in affirmative imperatives in Late Modern English”に変更した。

(2) 2010 年度には、「研究計画調書」および当該年度「研究の目的」「研究実施計画」に則り、8 月 23-27 日開催の第 16 回国際英語史会議（於ペーチュ大学、ハンガリー共和国）において、“A history of the auxiliary *do* occurring in affirmative imperatives in Late Modern English［後期近代英語における肯定命令文の do の歴史］”と題する口頭発表を行った。（本報告書５．〔学会発表〕⑤）

これにより、報告者は、肯定命令文で使われる助動詞 do が辿ってきた歴史に関して、主に 1500-1900 年に書かれた 150 冊の日記・書簡資料の調査結果を発表し、日記・書簡資料の調査が英語史の修正に多大な貢献ができることを示した。具体的には、*Do* + 動詞, *Do* + *you/thou* + 動詞, *Do* + 副詞 + 動詞など、英語史の中で発見した 10 個の統語的異形の型と頻度を 50 年刻みに示しながら、歴史の中でどのような意味・統語論的環境下でどの程度使われ今日に至っているかを明らかにした。他に大規模な類例研究はなく、未踏の分野を克明に明らかにした功績は大きいと、特にドイツ・イギリス・フィンランド・デンマークの学者から賞賛された。（なお、この発表内容の一部を、2013 年 8 月締め切りの、近代英語協会 30 周年記念論文集に応募する予定である。）

同年度には、また、*Language Change and Variation from Old English to Late Modern English* (Frankfurt: Peter Lang)が刊行された。報告者の論考“Uncovering of rare or unknown usages: a history of *seem* meaning ‘to pretend’［稀有または未知の語法の発

掘―動詞 seem「～のふりをする」の歴史]”が所収されている。(本報告書５.〔図書〕②)

この語法はこれまで、シェイクスピアに 7 例、19 世紀末の英国南部方言に 1 例報告されているだけである。この論考で両者の間の時期から多数の用例を提示したことにより、ブリテン島の日常語レベルでは存続していたという新事実が明らかとなった。この論考は、併せて、現代英語の二つの謎、派生語 seemer, seeming, seemingly に「～のふりをする」の概念が存在するにもかかわらず seem にないのはなぜか、アメリカ英語に存在するのはなぜかという二つの謎を解明した。派生語より前に seem 自体に「～のふりをする」の概念が存在していたという新事実、アメリカ移住前のイギリス英語には既に存在していたこの語法を移民がアメリカに運んだが、本国ではその後この語法が廃用になったことを実証した。歴史認識を改める必要があることを提唱した。

2010 年度の業績はどちらも、未踏の日記・書簡資料の分析がいかに英語史実の新発見に貢献できるか、英語史の訂正に多大な貢献ができるかを突き止めた研究である。

なお、これら以外にも、「prevent / save / stop / etc. + 目的語 (+ from) + 動詞-ing」構造の用例収集を行い、構造別、意味･統語論的範疇の別、史料別、50 年単位別に分類したが、動詞や時期による偏りが著しいため、さらに用例収集を続けることにした。近い将来に、まずは学会口頭発表を通じて成果を公表したいと考えている。

(3) 2011 年度には、「研究計画調書」および当該年度「研究の目的」「研究実施計画」に則り、国際会議口頭発表 1 件と論文 1 点を公刊した。量的には決して多い成果とはいえないが、本務校の通常業務に加え、スタッフ 27 名を抱える本務校英米学科主任としての公務、会員 250 名を擁する近代英語協会の事務局長として協会を管理統率する仕事の傍ら行った成果である。

まず、英語の語形成と意味論の歴史に関する国際会議（於ワルシャワ市、ポーランド共和国]）において、“A history of negative contractions［否定辞縮約形の歴史]”と題する口頭発表を行った。(本報告書５.〔学会発表〕④) don’t, doesn’t, didn’t, can’t, couldn’t 等の助動詞縮約形がいつ頃どのような順序で確立し拡散していったかを、129 冊の日記･書簡資料の網羅的調査と Oxford English Dictionary on CD-ROM の分析結果を証拠に示した。古い時代には異綴りが数多く存在するが、1 例たりとて収集漏れがないよう、細心の注意を払った。総 13,528 例が根拠になっている。質疑応答の中で、これほど大規模な類例研究は他になく、未踏の分野に踏み込み新事実の発見をした功績は大きいと、特にベルギー、ポーランド、フランスの学者から賞賛され、科学研究費補助金助成事業である本研究課題が英語史の新事実の発見や修正に多大な貢献ができることを確信した。この発表は助動詞 do を中心に、それ以外の助動詞にも枠を広げた研究で、日記・書簡資料の調査が英語史の修正に多大な貢献が可能であることを改めて証明した。

同年度には、また、「3 人称単数主語に呼応する don’t の歴史―He don’t care から He doesn’t care へ」と題する論文を公刊した。（本報告書５.〔雑誌論文〕①）この論考は、主に、1500 年以降のイギリス英語において、19 世紀中頃が he don’t care から he doesn’t care へ移行した鍵となる時期である点、以前は教育を受けた人々でさえも he don’t care を使用していた点を、129 冊の日記・書簡資料の精査により示した論考である。併せて、アメリカ英語では he doesn’t care の受入が 20 世紀に入ってからであったと言われているが、その謎の解明も行った。

なお、この年度の交付申請書に、動詞 have の進行形の歴史、I not say 型否定平叙文の歴史、beloved が従える前置詞 of/by の相剋の歴史について論文公刊に向けて準備を整えたいと書いたが、聴衆や読者を圧倒できるであろうほどの用例に恵まれていないため、1 万例を越えるまでもうしばらく用例収集を続けたい。

(4) 最終年度の 2012 年度には、本務校の通常業務と近代英語協会事務局長職をこなす傍ら、「研究計画調書」および当該年度「研究の目的」「研究実施計画」に則り、1 つの国内学会と 2 つの国際会議口頭発表を行い、著書（分担執筆）1 点を公刊した。国際会議は、ヨーロッパにおける報告者の研究発表のホームグラウンドである国際英語史会議（第 17 回、2012 年 8 月 20 日-25 日、於チューリヒ大学、スイス）と、ヨーロッパ言語学会（第 45 回、2012 年 8 月 29 日-9 月 1 日、於ストックホルム大学、スウェーデン）である。

まず、近代英語協会第 29 回大会では、「否定辞縮約の歴史をめぐる問題点」という題目の下、129 冊の日記･書簡資料の網羅的調査と Oxford English Dictionary on CD-ROM 等の分析結果に基づき、現在形の縮約形 don’t, can’t, won’t, shan’t と過去形 didn’t, couldn’t, wouldn’t, shouldn’t および doesn’t の確立時期には 100 年～150 年の開きがあったという発見を披露し、その理由にも迫った。さらに、Why don’t you V?のような、否定辞縮約形を内包するいくつかの構文の確立時期についても言及した。英語史の新事実の発見に、聴衆から評価を受けた。(本報告書５.〔学会発表〕③)

次に、第17回国際英語史会議では、“The period of establishment of tag-questions”［付加疑問文の確立期］”という題目の下、前半部分で、43,699例を根拠に、助動詞別・構造別・機能別に、25年単位ごとに統計数値を示し、否定辞縮約形の確立期は1850年より少し前の時期であると規定し、後半部分で、構造上否定辞縮約形が確立していることが大前提となる付加疑問文の確立期もほぼ同時期であると、用例総数1,018例を構造ごとに25年単位ごとに生起数を示しながら、特定した。否定辞縮約形や付加疑問文に関する大規模研究はなく、発表可否を審査する匿名査読者から“Excellent!”、聴衆から“fantastic presentation!”, “Brilliant, Congratulations!”等の賛辞をいただいた。2009年に弟子のS. Hoffmann氏とともに15-16世紀英語の付加疑問文に関する論文を発表したG. Tottie氏から“very impressive”,“interesting and monumental work”という賞賛を受けた点は、殊更意義深い。発表後、数人から、著書として出版することを勧められた。(本報告書５.〔学会発表〕②)

さらに、第45回ヨーロッパ言語学会では、“A correlation between the establishment of negative contractions and the development of their related idioms: with special reference to *can't help* V-*ing* and its variants［否定辞縮約形の確立とその関連構文の発達の相関―特に *can't help* V-*ing* 構文とその同義構文について]”という題目の下、縮約形の確立が縮約形を伴う構文とどのような関係にあるかについて、「～せざるを得ない」の意の *can't help* Verb-*ing*, *can't but* Verb等の構文を取り上げ、630例を証拠に事例研究を披露した。司会者のG. Walkden氏から、こんなに整然とした発表は経験したことがないという趣旨の賛辞を得た。ここでも、著書にするよう勧められた。本研究課題が英語史の新事実の発見や修正に多大な貢献ができることを確信した次第である。(本報告書５.〔学会発表〕①)

また、2012年度には、2010年9月に脱稿していた著書（分担執筆）「否定命令文の歴史的発達―V *not* 型から *do not* V型へ―」(秋元実治・前田満編『構文化と文法化』、ひつじ研究叢書（言語編）第104巻、第10章）が、日本学術振興会から出版助成をいただき、出版の日の目を見た。(本報告書５.〔図書〕①)

以上のように、報告者は、第5節に示されている2点の著書(分担執筆)、１編の紀要論文、４つの国際会議口頭発表、１つの国内全国学会口頭発表の仕事を通して、16－20世紀日記・書簡資料が英語史研究へ大きく貢献できることを示した。日記・書簡資料が言語変化の最前線を知る上でいかに重要であるか、研究手薄な日記・書簡資料の調査は、未発見ないしは稀有な語法の発掘にいかに貢献できるかを証明した。文学作品に偏っていたこれまでの研究を補うことができたと考えている。日常レベルの言語使用が期待される日記・書簡資料を分析した報告者の研究により、特に非文学言語の研究の必要性が浮き彫りにできたと判断される。

英語史研究の中で、日記･書簡の英語を集中的にしかも大量に分析した研究は類例がなく、報告者が行った大規模研究は、主として文学言語に基づいている従来の英語史研究とは一線を画し、その欠落部分を補うことになるであろう。国内外の研究の中で異彩を放つ研究を世に示せたと判断している。この研究を、今後も更に発展させたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 中村不二夫、3 人称単数主語に呼応する don't の歴史―He don't care から He doesn't care へ、*Mulberry*、第61号、23-44、2012年2月、査読なし

〔学会発表〕（計５件）

① 中村不二夫、“A correlation between the establishment of negative contractions and the development of their related idioms: with special reference to *can't help* V-*ing* and its variants”、The 45th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea（「否定辞縮約形の確立とその関連構文の発達の相関―特に*can't help* V-*ing*構文とその同義構文について」、第45回ヨーロッパ言語学会、於ストックホルム大学［スウェーデン王国]）、2012年8月31日
② 中村不二夫、“The period of establishment of tag-questions”、The 17th International Conference on English Historical Linguistics（「付加疑問文の確立期」、第17回国際英語史会議、於チューリヒ大学［スイス連邦]）、2012年8月21日
③ 中村不二夫、「否定辞縮約の歴史をめぐる問題点」、近代英語協会第29回大会、於青山学院大学、2012年5月25日
④ 中村不二夫、“A history of negative contractions”、Historical English Word-Formation and Semantics Conference、School of English、Academy of Management、Warsaw、Poland（「否定辞縮

約形の歴史」、英語の語形成と意味論の歴史に関する国際会議、於スクール オブ イングリッシュ、アカデミー オブ マネージメント、ワルシャワ市［ポーランド共和国]）、2011 年 12 月 10 日

⑤ 中村不二夫、“A history of the auxiliary *do* occurring in affirmative imperatives in Late Modern English”、16th International Conference on English Historical Linguistics、University of Pécs（「後期近代英語における肯定命令文の do の歴史」、第 16 回国際英語史会議、於ペーチュ大学［ハンガリー共和国]）、2010 年 8 月 24 日

〔図書〕（計２件）

① 中村不二夫、「否定命令文の歴史的発達―V *not* 型から *do not* V 型へ―」、秋元実治・前田　満編『文法化と構文化』（ひつじ研究叢書（言語編）第 104 巻）、東京：ひつじ書房、第 10 章、287-328、2013 年 2 月

② 中村不二夫、“Uncovering of rare or unknown usages: a history of *seem* meaning ‘to pretend’”、（「稀有または未知の語法の発掘―動詞 seem「～のふりをする」の歴史」、in J. Scahill, et al., ed. (2010) *Language Change and Variation from Old English to Late Modern English: A Festschrift for Minoji Akimoto* (Linguistic Insights series, 114), Frankfurt/M: Peter Lang、217-238、2010 年 7 月

６．研究組織

(1) 研究代表者

中村　不二夫（NAKAMURA　FUJIO）
愛知県立大学・外国語学部・教授
研究者番号：20149496